

平成24年9月9日、島々ぬくとぅば語やびら大会、琉球新報ホール（那覇市泉崎）

基調報告：しまくとぅばもわからない若者たちに当てはあるのか

那覇市文化協会うちなーぐち部会長 宮良信詳

今から233年前のことになりますが、明治政府は一国の形態を維持している琉球に対して武力を発動して、1879年に沖縄県を配置しました。それ以来、不本意ながらも、先祖代々継承してきた琉球諸語から日本語、いわゆる大和語、への置き換えが進行し始めました。その結果、琉球諸語は今や消滅の危機に瀕していますが、そのことに手をこまねいて傍観しているばかりでは取り返しのつかない事態に至ることは言うまでもありません。言語も文化も先祖代々受け継いできたものであるにもかかわらず、文化の基層となる言語の継承が途絶えてきています。もしも言語が完全に消滅したとすれば、文化の空洞化がすぐに起こります。伝統的な言語を継承させる責任はもちろん大人の側にあります。その責任を果たさないでいる大人たちは、しまくとぅばが話せなくなった若者たちをいったいどこへ向かわせようとしているのでしょうか。地域の伝統的な文化や価値観を受け継がせたいのであれば、しまくとぅばの復興しかありません。しまくとぅばが分からない沖縄の若者たちが最初に獲得した言語がたとえ日本語であっても、沖縄の地域社会や自然とつながっているのは沖縄語（うちなーぐち）の方であり、大和語のことばの世界ではありません。そのため、沖縄の若者たちは地域社会やそれを取り巻く自然と密接につながった沖縄語によって、深い感動を覚えたり、心の中から湧き上がる感情をことばに表わしたりする機会を失っています。「うちーなーやまとぅぐち」はそのことに対する若者たちの必死の抵抗であり、私には若者たちの心の叫びが聞こえてくるような気がしてなりません。今日はこのようなことを話題にして話を進めさせていただきたいと思います。

人間にとってことばとは何か？

まず初めに、人間にとってことばとは何か？ということを考えてみたいと思います。ことばは単に意思伝達のための手段ではありません。人間が集まるところには必ずことばがあり、ことばをもたない人間の集団は存在しないという事実にも、着目して欲しいと思います。どの生き物でも、その種固有の遺伝

的に獲得した能力を発揮することで、生存を可能にしています。動物分類学上は霊長目ヒト科の哺乳類である、我々人間にとって、ことばを話す能力は生まれながらに獲得した能力なのです。

地球上のどの生き物も生まれながらに獲得した能力のおかげで生存競争に勝ち残っています。渡り鳥は寒さを逃れ、餌を求めて何千キロの長旅をしますが、そのためにはまず季節を正確に感知したうえで、目的地に間違いなくたどり着くことが必要になります。それでカレンダーと羅針盤の働きをする能力が必要です。飛行する方角が少しでもずれてしまうと、ずうっと同じ箇所を旋回するばかりで、終いには疲れ果てて、海の藻くずになりかねません。稚魚のときは川で過ごし、成長すると大海を回遊し、産卵の為に元の河川に戻ってくる鮭にしても、潮の流れや海水の温度などの細かい情報を感知するセンサーと、その必要な情報に基づく航海地図を作成し、それを記憶装置に格納して必要な時にいつでも取り出せる能力が脳のなかに準備されていなければなりません。クモも親からも誰からも教わることはないにもかかわらず、網目の巣が張れるので、餌を確保でき、生きながらえることができます。このように、渡り鳥が自然界から時節を読み取り、飛行の際に地球の磁気を感じることができる能力は生まれつきのものであり、鮭のセンサーやその情報蓄積能力もそうであり、クモが巣をはれるのも、生まれつきのもので生存に不可欠な能力です。

しかしながら、空を飛べるわけでもなく、海を回遊できるのでもなく、地上においても他の動物のように速く走ったり、跳躍できるのでもなく、腕力や嗅覚においても劣る人間にとって、生存に不可欠な能力とは何でしょうか？ 用途に応じて新しくものを創りだしたり、新たな事態に対応・処理する能力こそが生存に必要な遺伝的に獲得した能力だと考えられます。例えば、自然界に適応するために道具は作られますが、羅針盤、カレンダー、時計、温度計を始めとするセンサー、捕獲用の網、飛行機、船、自動車などはすべて他の動物が持つ能力との差を埋めるために考案した道具です。他の動物のように、動きも腕力も嗅覚も視覚も聴覚も発達していない人間が、弓、槍などの道具を使い、奇声をあげながら馬の群れを崖っぷちまで追いつめて、逃げ場を失って転落した馬を食用にしたという人類学における報告は、人間の共同作業を表わす例です。一カ所に集まって定住すれば、共同作業を最も効率よく進められるということで、人間は社会生活を営んで周りの環境に対応しているのだと思います。

言葉はまさしく社会生活を営むために必要になってくる道具です。言語能力

とは、そのために開発されている遺伝的に獲得した能力なのです。我々人間は幼児の時期であれば、周囲で話されている言語が何であろうとも、民族や国籍の違いとは関係なく、その言語をいつのまにか操れるようになります。つまり、新しい言語環境に自然と適応できるように創られています。逆に、周囲で話されている言語に充分に対応できないことはその社会からはじかれてしまうことを意味しますので、生存が危ぶまれます。幼児期に不幸にして社会から完全に隔離されたり、オオカミに育てられたりして、未熟な言葉しか獲得できなかった場合、社会には適応できません。寂しい時は壁に向かってでも話したり、気を紛らわすために独り言をしたりするのが人間です。このように、言語能力は人間の生活というよりも生存と深く係わっています。人間を生かすも殺すも言葉ひとつでできるからです。

ことばの精神世界の揺るぎ

言語能力は人間の生存と深く係わっているにも関わらず、沖縄の若者たちが最初に獲得した日本語には沖縄の地域社会や自然と密着していない部分が多く、描く言葉の精神世界に揺るぎがあります。

個別の言語は、外界をどう切り込むかという点で違いがあります。日本語の「山」は英語の mountain を意味しますが、沖縄語では木の茂った森を意味し、例え窪地であっても雑木が生い茂った場所は「やま」と言えます。日本語の「川」に対応する沖縄語の「かー」は井戸や水の湧き出している泉を意味します。さらに、動詞の「むちゅん」は日本語の「持つ」とは用法がかなり違います。「なーだ をうとう むたに？」を日本語に直訳すると、〈まだ夫をもたないのか〉となり、その表現は「嫁に行く」という日本語的発想とは合いません。さらに、「つくわ むっちょーみ？」は「かさぎとーみ？」と同じ意味で〈子を宿しているか〉になりますが、日本語の「子を持つ」にはそのような意味はありません。また、「をうとう むっちょーみ？」は言えますが、「*とぅじ むっちょーみ？」が言えないのは、「むっちょーみ？」における「むちゅん」の本来の意味は〈所有する〉ではないからです。「やー むちゃー」が〈家を所有する人〉ではなく、〈家庭を内から支える人、主婦〉を意味することから、「むちゅん」の本来の意味は〈内から支える〉ことで、この文脈であればその対象は家庭、夫、子に限られてきます。そのため、女性に対して言う「をうとう むっちょーみ？」は〈夫を内助する〉の意味にはなりませんが、「*とぅじ むっちょーみ？」では〈男性

が妻を内助する>を意味することになり、成立しません。同様に、日本語の「どの面下げて歩けるか」に対する沖縄語は「ちら むっちえー あっからん」になりますが、沖縄語の「ちら むっちえー」は<顔を内から支えては>、すなわち<面子を保っては>を意味することになります。「ちゅらさん」という言葉にしても、原義が「清らかである」なので、日本語の「美しい」とは異なる美意識が感じとられます。このように基本的な単語だけからも解るように、自然界のものや人間の行動をどのように切り込むかということに関して、日本語と沖縄語では基本的な違いがあります。

外界に対してどのように切り込みを入れるのかということだけではなく、言葉はさらに人間の精神の自由さとも密接に結びついて来ます。身近な例をあげますと、「命どう宝」は沖縄の戦争体験と深く連動していて、沖縄語の精神世界において重く響くものですが、日本語に直訳して「命こそ宝」と言っても、そこには特別な感動はありません。「行逢りば兄弟」にしても、うちなーんちゅの気質や模合などに見られる助け合いの精神と結びつくからこそ社会生活における規範として受けとめられます。しかし、日本語に置き換えた「会えば兄弟」には格別な意味はありません。このように、言語が創りあげる精神世界は地域社会、それを取り巻く自然、歴史体験などと密接につながっています。

沖縄の若者たちが初めて獲得した言語がたとえ日本語であっても、沖縄の地域社会や自然とのつながりという面では明らかなずれがあります。沖縄の地域社会や自然とのつながりをもつのは沖縄語の精神世界の方であり、大和語の精神世界ではないからです。沖縄語を知らない沖縄の若者たちが初めて獲得した言語は不本意ながらも日本語ですが、沖縄の地域社会や自然とつながってはいません。このような原初的な意味で、沖縄語がわからない若者たちは地域社会や自然とつながった言葉そのものを聞いたことはないことになり、人間として極めて不運なことです。沖縄の若者たちが地域社会やそれを取り巻く自然と密着した沖縄語を遣って、深い感動を覚えたり、心の奥から湧き上がる感情をことばに表わしたりする機会が奪い去られているのは、一社会人として若者たちに対して大変申し訳なく思います。

「うちなーやまとうぐち」は、それを補うために自然発生的に若者たちの間で生まれているのだと思われます。「清く、正しく、美しく」ではあまりにも建前に走り過ぎていると我々には感じられます。むしろ、「ちむ清(ぢゅ)らさ、ちむ強(ぢゅー)さ、ちむ広(びる)さ」の方が心に馴染むことから、若者

たちの抵抗が理解できる気がします。人間にとって言語は生存そのものと深く結びついているにもかかわらず、しまくとぅばをしっかりと継承させて来なかった（あるいは、継承して来なかった）現代の大人たちは、若者たちに対してどのような形で責任をとりますか。復興しか道はないように思われます。今年7月末にブラジル・サンパウロで開催された第1回世界若者ウチナンチュ大会でも沖縄語の継承を重要議題の1つにしています。若者たちは大人たちに対して、沖縄語の継承を声高に叫んでいるのにどう応えるのですか。

若者たちがしまくとぅばを学ぶことにより、しっかり自分の足元をみつめることができ、そこから先祖が残してくれた文化に誇りと自信が生まれ、地域との連帯感が強まり生きる喜びにつながります。

琉球の言語、文化、歴史教育の導入

本土日本と沖縄とは、言語的、文化的、歴史的、民族的に異なっています。しかしながら、沖縄の若者たちへの教育は、沖縄も本土と同様に言語的、文化的、歴史的、民族的に同一という前提に立っています。これは明らかな誤りです。そのため、沖縄の文化、言語、歴史が教科として導入されていません。琉球・沖縄の文化、言語、歴史の独自性を無視して、日本本土のそれと同じという、誤った前提に立っているため、沖縄の若者たちが現在の教育に対して、受動的、無関心になってしまうのは当然のことだとも言えます。言語的、文化的、歴史的なつながりが無い教育をしていることを沖縄の若者たちは心のどこかではっきり感じ取っているからです。学力格差の根源はそこにあると、社会言語学者のパトリック・ハインリッヒ教授は新報紙上で主張しています。その窮地を救うには、他府県とは異なる言語、文化、歴史に関する教育の本格的な導入が必要になります。そのような導入が制度的にできないのであれば、これは言語権を初めとする人権的な差別にもつながります。すでに、国連のB規約人権委員会も、2008年10月30日に「アイヌ民族・琉球民族の子どもたちが民族の言語、文化について習得できるような十分な機会を与え、通常の教育課程の中にアイヌ、琉球・沖縄の文化に関する教育も導入すべきだ」と日本政府に勧告しています。県教育委員会は、国連勧告の意味するところを十分に吟味し、本腰を入れて琉球・沖縄の文化、言語、歴史を教科として導入しなければならないことを文科省に訴えるべきです。

先祖代々受け継がれてきた伝統的な言語と文化を復興することによって、学

力格差を克服した例が世界中にたくさんあります。ハインリッヒ教授によると、ハワイ語を遣って教育を行う学校は全米平均以上の学力に達しているということです。一般に社会的、経済的な背景から、学力が低いと思われるハワイ語学校の生徒たちは、高等学校の卒業率は100%であり、80%以上の生徒が大学あるいは専門学校に進学しているということです。それとは別に、カナダでは英語とフランス語が公用語になっていますが、教科別に両言語を取り入れた教育方式の方が全教科を英語のみで行う教育方式よりも学力が伸びているという報告もあります。このようにして、「しまくとぅば」の復興によって教育的効果が十分に期待できることは、世界中の他の同様な事例から十分に証明されています。琉球・沖縄の地域社会やそれを取り巻く自然に根ざした「しまくとぅば」を、若者たちが学ぶことによってこそ、しっかり自分の足元をみつめることができ、そこから先祖が残してくれた文化に対する誇りと自信が生まれ、地域との連帯感が強まり生きる喜びにつながるからです。その結果、教育における受動性、無関心も解消されることになるはずです。

しまくとぅばの復興に対して、何ら策を講じないでいることが、琉球における諸言語、地域文化、価値観などの独自性が、少数民族に属するからという理由で軽視されて、強い勢力をもつ日本語、日本文化、日本的な価値観にだんだん吸収されつつある現状をみすみす助長させる結果を招いています。琉球諸語、琉球文化、価値観などが大和語やその文化の一部として吸収されてしまっても本当に構わないのですか。沖縄県民も、ウェールズやマオリやハワイの人々のように、言語消失を阻止する運動を真剣になって展開すべきだと私は思います。それを今しなくて、いつするのですか。後からでは遅過ぎます。琉球文化の真髄をさらに発展させるためにも、しまくとぅばの重要性を再認識し、その復興に向けて一致団結すべき時は今しかないことを肝に銘じて、不退転の決意で臨むべきです。